

道徳づくりがばんの基盤

松下幸之助の教育観と教育改革国民会議の提案

教育改革国民会議担当室主幹調査官

大江 弘

松下幸之助は、昭和二十一年にPHP研究所を設立以来、「社会がよくならなければ人びとの幸せもありえない」と考え、政治や社会に対して実に多くの提言を行い続けました。そうした中で、特に松下が重視したものの一つが、教育に関するものです。

松下は、講演、対談、寄稿などあらゆる機会を用いて教育問題について語り、教育こそ我が国の最重要課題であると訴えました。松下が座長としてまとめた「世界を考える京都座会」編の『学校教育活性化のための七つの提言』は、臨教審の審議の流れに少なからぬ影響を与えたとされ、今日においてなお高く評価されています。

しかし、なぜ松下は、教育を我が国における最重要課題としたのでしょうか。

松下は、企業経営の第一の要諦は人材育成にあると考えていました。仮に資金や設備などがいくらあっても、それを十分に生かせるかどうかはすべて人しだいである。むしろ、いくらたくさん物があっても、それを生かせない人ばかりがいたので

は、その物はなきに等しい。技術も、金も、あるいは情報も、すべて人があつてこそである。すなわち、企業の経営の成否は人にある。これが松下の持論でした。

事実、松下は、創業当初から社員教育にはたいへんな努力を払っています。まだ松下電器が小さかった頃、社員に対して松下は、「お得意先に行つて、『君のところは何をつくっているのか』とたずねられたら、『松下電器は人をつくっています。電気製品もつくっていますが、その前にまず人をつくっているのです』と答えなさい」とよく言っていたといえます。これは松下の考え方を端的に示すエピソードでしょう。具体的な施策としては、昭和九年に店員養成所を開設するなど、早くから人材育成のための施設を設けたりもしています。

このような松下にすれば、企業経営に限らず国家の盛衰もまた人しだいであるという見方になるのはごく自然でしょう。いかに優れた制度、システム、あるいは政治、経済体制であろうとも、それを動かすのは人。その人の育成なくして、国の繁栄、平和はない。だからさらなるお互いの繁栄、平和、幸福を

実現するためには、よりよい教育を行なつてよりよい人を育てなければならぬ。すなわち、教育こそが国家経営の第一の要諦である。このように考えればこそ、松下は、教育を我が国における最重要課題と位置づけたのです。

それでは、松下の教育観とはいったいどのようなものだったのでしょうか。人を育て人を生かすことによつて世界的な企業グループを築き上げたと言われる松下だけに、その教育観には今なお学ぶべき点があるように思われます。

教育の目的とは何か

教育とは、人間を教え導き、育成することだと言えます。しかし、そう言つてみたところで、そこからはどんな人間を育成すればよいのかということも、どのように育成すればよいのかということも、具体的なことは何ら導き出せません。教育すべき人間像や教育方法などの具体的なことは、やはり、何のため人間を教え導き、育成するのか、すなわち教育の目的がどこにあるのかを、はっきりつかんでこそ見出すことができるものでしょう。教育に関する議論の場で、しばしば教育の制度や方法について意見が対立することがありますが、畢竟するにそうした意見の対立は、この教育の目的についての考え方の違いに根ざしていると言えます。

また松下幸之助は、何のために経営するのかという、経営についての基本的な考え方である経営理念を、企業経営において最も重要なものとしていました。なぜなら、経営理念をしっかりとつかんでいるかどうかは経営の成否を分けるということ、松下は半世紀にわたる事業経営の体験から強く実感していたからです。こうした考え方は教育においても同様で、松

下は何のために教育をするのか、教育の目的をしっかりとつかむことがきわめて大事であると考えていました。

それでは松下は、教育の目的についてどのように考えていたのでしょうか。松下は次のように述べています。

「ところで、教育とはそもそも何を目的としたものか。教育の大本というか究極の目的はどんなものだろうか。いろいろのことが考えられるだろうが、結局は『お互い人類の繁栄、平和、幸福を高めていくために、心身ともに健全な人間を育成する』ということに帰するのではないだろうか。それが教育の大本である。」

こうしてみると、松下の考える教育の目的は、決して斬新でも特異なものでもないことがわかります。誰しも納得できると同時に、ごく当たり前のことにも思われるでしょう。しかし、そのごく当たり前のことをしっかりと踏まえているかどうか、心から納得しているかどうか、教育問題を考える上で大きな違いとなつて現れてくると言えるでしょう。

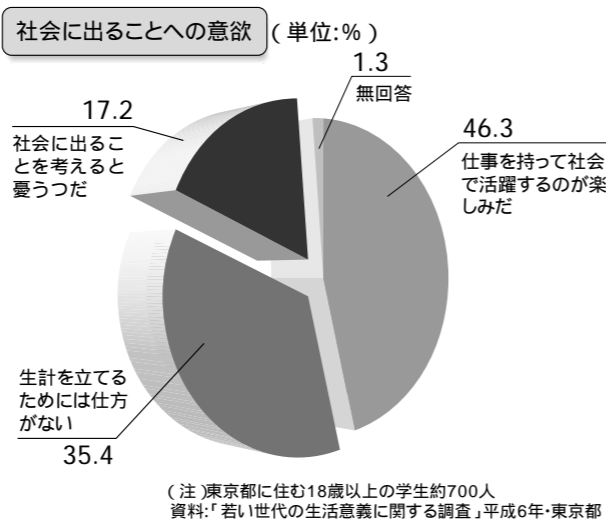
画一的な教育から個性、天分を育む教育へ

松下幸之助は、教育に関して大きく二つのことを繰り返し訴えていました。

その一つは、人それぞれの個性、天分を見出し、生かす教育を実現しなければならぬということでした。

松下は、一人ひとり顔かたちが異なるように、人間にはそれぞれ個性、天分が与えられていると考えていました。そしてその与えられている個性、天分を見出し、十二分に発揮して、みずからの天命を果たしていくところに、個々には人間としての真の生きがいや満足感、幸福感が生まれ、社会全体としてはよ

大学への進学率が高まったにもかかわらず、半数以上の若者は社会に出ることに消極的である



学することがどれほど無意味かを国民自身が自覚するとともに、それぞれに与えられた個性、天分を見出し、いかにそれを生かしていくかを考えつつ進路を選択するよう、お互いの認識をあらためることが必要なのかもしれません。偏った平等観やいびつな横並び意識に振り回されることなく、それぞれの個性、天分を生かし合うことを考えることが、これからの教育においてさらに重要になることは間違いないように思われます。

道徳教育、人間教育を欠いてはならない

人それぞれの個性、天分を見出し、生かすということと同時に、教育において松下幸之助が重視したいま一つは、道徳教育

すばらしいことでしょうか。しかし一方で、学びたいという意志もなにもに大学へ進学するという人がさらに増えることも予想されます。自分自身の個性、天分を何ら顧みることなく、ただみんなが行くからとか、大学ぐらい出ておかないと恥ずかしいというような理由で大学に進学する人が増えたら、これは松下の言う通り、本人にとって不幸であるばかりか、ますます激化する国際競争を乗り越えていかなばならない我が国としても、きわめて大きな問題でしょう。

やはり、無目的にただ大学へ進

「道徳は実利に結びつく」と題する論考で松下は次のように述べています。

「私は、お互いの徳性が養われ、社会全体に正しい善悪観にもとづいた活動が生まれてくれば、たんに人間関係がよくなる

を上げたということについては、松下も認めています。しかし、たとえそうであっても、やはり戦後教育の問題点はその一律、画一的な教育のあり方にあると松下は言うのです。規格化された教育の仕方にうまく合った個性、天分をもった人は確かに伸びるかもしれませんが、しかし、それ以外の多くの人は、なかなか自らの個性、天分を見出すことも、伸ばすこともできなくなります。それは、個性、天分を育む教育こそ大切であるという松下の考え方からすれば、何より大きな問題ということになるでしょう。

昭和四十年代、日本経済は飛躍的な成長を遂げ、社会資本の整備、充実とともに、高等学校へ、さらに大学へと進学する人が急激に増加しました。松下はそうした社会の発展を目にしたつ、教育の機会や設備が充実するのは大いに好ましいことであるとしながらも、誰も彼もが画一的に進学することには強い疑問を投げ掛けました。

高等学校にしろ、大学にしろ、本来は専門的な学問の研究を目指す人が進むべきところではなからうか。にもかかわらず現状は、ただ就職に都合がいいからとか、結婚に役立つなどの理由で進学するという傾向が強い。誰もが学問、研究に適性があるわけではない。人にはそれぞれに応じた個性、天分があるはずである。それを無視して、みんなが画一的な教育を受け、ただがむしゃらに進学するというのでは、本人にとって不幸であるばかりでなく、国全体としても大きな損失ではないかというわけです。

数年後には、希望すれば誰でも大学に入学できる全入時代がやってくると言われています。学びたいという意志さえあれば、誰でも大学で学ぶ機会を得ることができる、これはとても

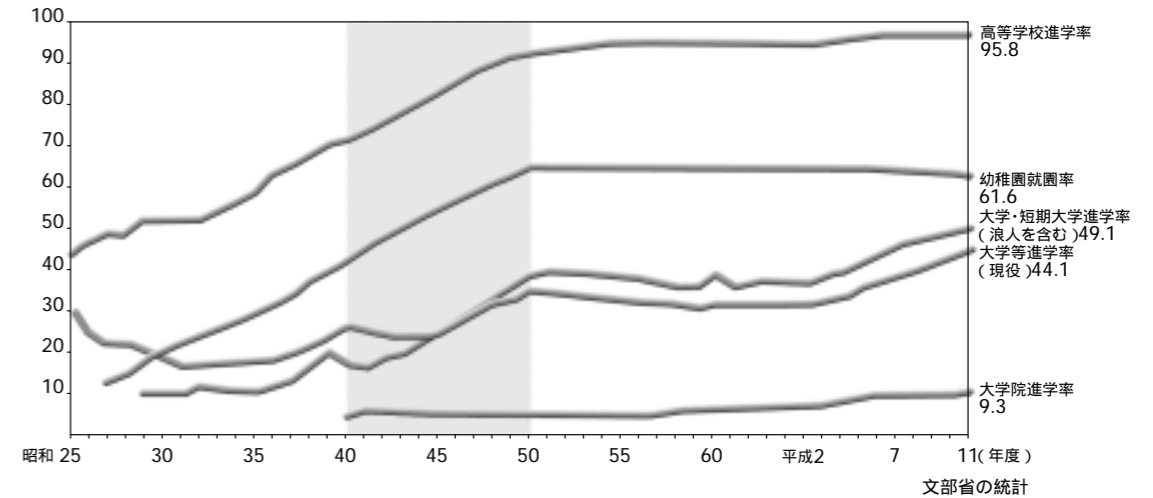
松下は、人間として共同生活を送っていく上で大切なことは、知識なり、産業の仕組みなり、政治の運営なりいろいろあるが、何といても道徳、道徳というものが大きな役割を果たしているとした上で、次のように述べています。

「今日、ちょっと世界に目を向けてもらいになってもおわかりになりますように、道徳や道義がすたれており、秩序が非常に弱く、乱れている国で、繁栄している国はございません。物価の騰貴をしている国を見ましても、その一つの大きな原因は、治安が乱れているか、あるいは道義が高くないようなところにあるようです。そういうことを考えてみましても、道徳、道徳はほんとうに実利に結びつくものであります。道徳は犠牲をはらうものではない。ほんとうに共同の生活の上に繁栄と平和と幸福とをもたらすものである。だから、道徳こそはいちばん基盤にならなくてはならない。こう感ずるわけでありまして、それが今まで軽視されておつたのは、まことに残念な次第でございます。」

道徳というものが、お互いの人間関係を良好に保つため、あるいは人格的な高まりのために必要であるということは、松下自身もしばしば述べるところです。しかし松下は、道徳は単にそうした精神的な意義だけではないわけではない、それは実利にも結びつき、ついには共同生活の上に繁栄と平和と幸福をもたらすものでもあると言っています。

昭和40年代に高校、大学への進学率は急激に高まった

就学率・進学率の推移 (単位:%)



り高いレベルでの繁栄、平和、幸福が実現されるのではないかと考えています。

こうした考え方に立つ松下は、戦後教育の問題点について次のように述べています。

「ところで、戦後の教育についてはのいちはん大きな間違いは、一律の義務教育でしような。千差万別という言葉があるでしょう。これは、人間の心もそうですわな。ところが世の中が進んでね、だんだん知識がふえてくると、千差万別じゃない、万差億別ですわ。だから、教育でもね、万差億別の教育をしなければだめですよ。一律にやっては、人は育ちませんわ。そういうところに根本の間違いがある」

規格化され、すべての人々に一律に施された教育が、広く国民全体の平均値

を上げたということについては、松下も認めています。しかし、たとえそうであっても、やはり戦後教育の問題点はその一律、画一的な教育のあり方にあると松下は言うのです。規格化された教育の仕方にうまく合った個性、天分をもった人は確かに伸びるかもしれませんが、しかし、それ以外の多くの人は、なかなか自らの個性、天分を見出すことも、伸ばすこともできなくなります。それは、個性、天分を育む教育こそ大切であるという松下の考え方からすれば、何より大きな問題ということになるでしょう。

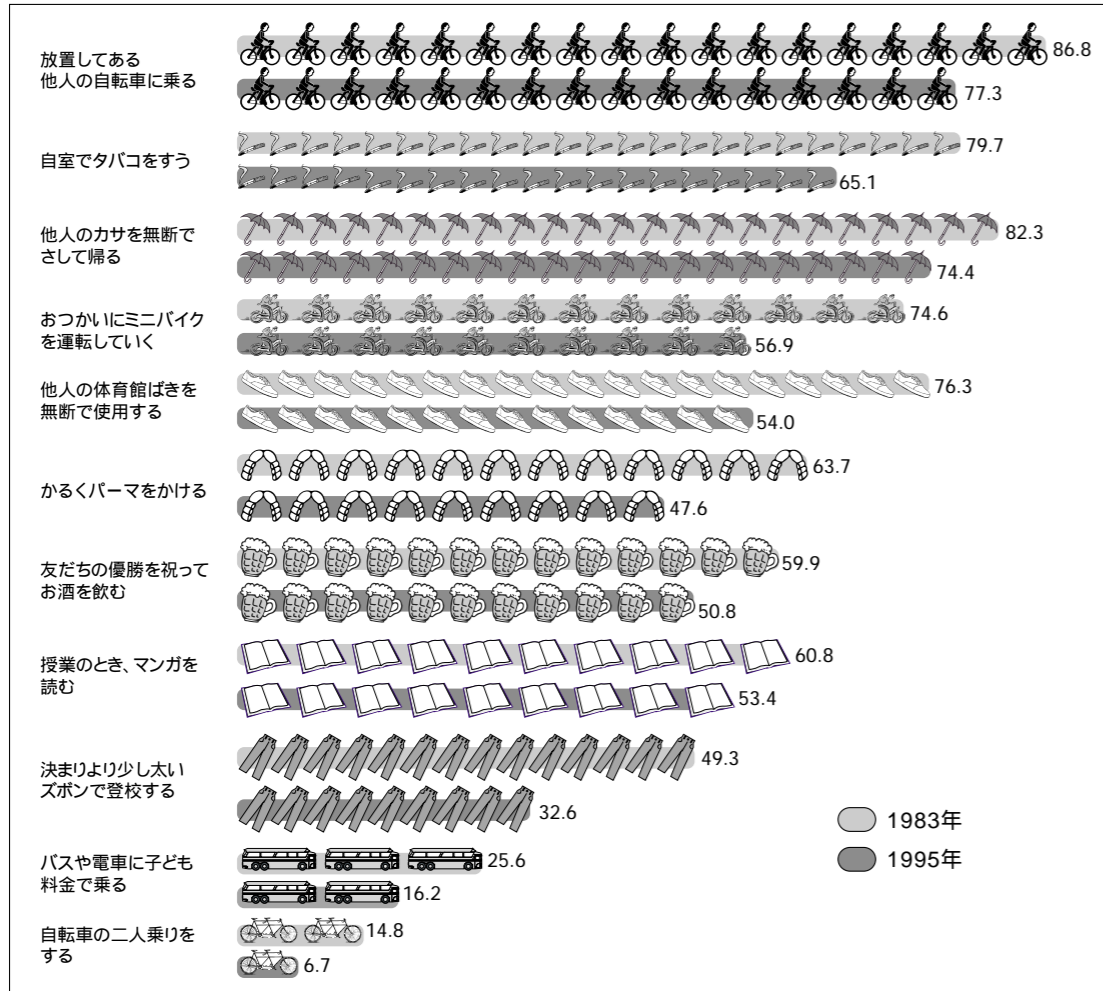
昭和四十年代、日本経済は飛躍的な成長を遂げ、社会資本の整備、充実とともに、高等学校へ、さらに大学へと進学する人が急激に増加しました。松下はそうした社会の発展を目にしたつ、教育の機会や設備が充実するのは大いに好ましいことであるとしながらも、誰も彼もが画一的に進学することには強い疑問を投げ掛けました。

高等学校にしろ、大学にしろ、本来は専門的な学問の研究を目指す人が進むべきところではなからうか。にもかかわらず現状は、ただ就職に都合がいいからとか、結婚に役立つなどの理由で進学するという傾向が強い。誰もが学問、研究に適性があるわけではない。人にはそれぞれに応じた個性、天分があるはずである。それを無視して、みんなが画一的な教育を受け、ただがむしゃらに進学するというのでは、本人にとって不幸であるばかりでなく、国全体としても大きな損失ではないかというわけです。

数年後には、希望すれば誰でも大学に入学できる全入時代がやってくると言われています。学びたいという意志さえあれば、誰でも大学で学ぶ機会を得ることができる、これはとても

最近の中学生の規範意識はますます低くなり、 道徳教育の欠如があらわになっている

中学生の規範意識 「とても」+「かなり」悪いと思う割合(%)



(注)東京、神奈川、埼玉の中学1～3年生、約1700人を対象に調査
資料:『中学生は変わったのか』平成7年・ベネッセ教育研究所

述べています。

「この仕事は兵役のように戦争に行つて命を失つというような危険性はない。そうでなく、美しい自然の中で同じ年代の青年同士がともに汗を流しつつ働くわけである。それは健康にも非常にいいであろうし、また友情やお互いの連帯感といったものを育む絶好の機会ともなるのではないだろうか。さらにまた、そのように汗を流して働くという労働体験はその後の人生なり仕事の上にも生きる貴重なものとなると思う。そういうことがなければ生涯肉体労働の喜びとか味わいというものを経験せずにすんでしまうかもしれない人もあろう。

そういう人びとが、身をもって労働を味わい、労働の真の価値を知る機会にもなるわけである。そして何よりも、この国土を自分の汗と労働によって開発し、そこに新たな価値を生み出すというところから、みずからの国に対する大きな誇りと深い愛情が感じられるようにもなるのではなからう

とか、精神的に豊かになるといふばかりでなく、実際に日常生活動もうまく運び、物もより能率的に生み出されてきて物的にも豊かな生活がもたらされてくると思つている。つまり、道徳というものは、人間生活の各面に、大きな実利実益をもたらすものだといつてもよいと思つのである。

こうした松下の考え方に立てば、ただ公共心が欠けているというような精神的な問題としてのみならず、社会のさらなる繁栄を期す上においても、道徳教育は決して欠くことのできないきわめて重要なものということになります。松下は、道徳教育の徹底如何が、日本の将来を決定するとし、義務教育の半分を道徳教育に当てるべきであると言つています。言い換えれば、「お互い人類の繁栄、平和、幸福を高めていく」ことができるかどうかは、お互いの道義、道徳の涵養の度合い、すなわち道徳教育にかかっているというわけです。

昭和四十六年の『PHP』三月号誌上で松下は、日本はこれから「精神大国」「道徳大国」を目指さねばならないと主張しています。これは、ただ他国から尊敬される国になろうということだけを述べているわけではなく、道徳は実利に結びつくという松下の考え方に立つて、世界において最も繁栄した国になろうという提言でもあるわけです。

このように松下が道徳の重要性を訴えていた昭和四十年代は、いまだ道徳を軍国主義国家を促すものの一つと見なされることが少なからずありました。そのため松下は、しばしば道徳の本来の意義を説明するとともに、そうした誤った認識をあらためるよう訴え続けなければなりません。道徳教育が戦争を引き起こしたのではない、誤つた道徳が問題であつたのだ。これからは正しい道徳についての研究を深め、子どもの頃

からしっかりと教えなければならぬ。そのように説明した上で、松下は、義務教育における最重要課題として道徳教育を徹底して行うことを広く社会に訴え続けたのです。

教育改革国民会議の提案と松下幸之助

本年三月より、総理大臣の私的諮問機関である教育改革国民会議が発足し、これからの日本の教育のあり方について熱心な議論とともに、これまでにならぬ思い切つた提案が数多くなされています。筆者は、幸運にも事務局である教育改革国民会議担当室で運営に携つており、間近でその活発な議論に触れる機会を得ています。そこで本稿の後半では、その議論と松下幸之助の教育観との接点を考えてみたいと思います。

教育改革国民会議は、五月から七月にかけて、第一、第二、第三の三つの分科会に分かれて審議が進められました。第一分科会では人間性をキーワードに、道義、道徳と教育基本法を中心に議論がなされ、そこで提案された中で最も注目されたのが、「奉仕活動の義務化」ということです。それは、小学校、中学校では二週間、高校では一カ月、そして将来的には満十八歳の全ての国民に一年間の共同生活による奉仕活動を義務づけるというもので、たいへん大きな反響を呼んでいます。

この提案に対して賛否両論、いろいろ寄せられていますが、実は松下の提案の中にこれと似たものがあります。それは「国土創成奉仕隊」という名称で、「ある一定年齢の心身ともに健康な青年男子を選抜して、一年間または二年間、この事業に従事するように義務づける」というものです。この第一の目的は「新たな国土の創成」にあるのですが、この制度を通していろいろな好ましいことが生まれれるとして、松下は次のように

か。またこの国土創成奉仕隊においては、単に肉体労働をするだけではない。そういう国土創成の仕事だけでなく、時間をつくってそこでなければ味わえないいろいろな人間修行というか、心身の訓練の場ともなるのである」

第一分科会の提案ときわめて似通った趣旨であるばかりか、第三分科会の三つの柱の一つとして掲げられている職業観・勤労観の育成にも通じるものがあります。新たな国民の義務として肉体的な労働を伴う奉仕活動を課するということについては、数多くの問題があるに違いありません。しかし、こうしたことが、今日の我が国の教育において、また我が国の繁栄にとって有効であるとするならば、最初から否定するのではなく、勇気をもって大いに国民的な議論の中で検討すべきではないでしょうか。

第二分科会では、学校教育の改善と改革をテーマに話し合われました。そこからなされた提案に、「私立学校を設置しやすいうように基準を明確化し、施設・設備の取得条件を弾力化する」というものがあります。

この提案に対応する松下の提言としては、先にあげた「学校教育活性化のための七つの提言」に、「一、学校の設立を容易にして、多様化すること」というものがあります。「学校設立への規制や指導を緩和し、教育に志のある者はだれでも自由に学校を設立できるようにし、学校の種類を多様化すべきです。画一的な学校のみではなく、教育理念に燃えた人によって設立される、个性的、特色ある教育内容をもった学校の存在があつてはじめて、子どもたちの千差万別、それぞれのもつ個性を育むことが可能になるでしょう」との説明文には、松下の個性、天分を育む教育を実現しなければならないという思いが感じられます。

また第三分科会では、「プロフェッショナル・スクールの整備」ということも提案しています。これは、我が国が今日の国際社会で欧米に伍していくためには、実践的でも高度な専門性を備えた人材が不可欠であるとの社会の要請に基づいたもので、わかりやすく言えば専門的職業人養成の大学院とでも言うべきものをつくらねばならないという提案です。そのプロフェッショナル・スクールでは、ビジネス・スクール、ロー・スクールなどの経営管理や法律実務、あるいはファイナンス、教育、公共政策など、実に多様な実践的専門家が育成されることとなります。

松下は、その教育に関する提言の中で、より実践的な職業人を育成しなければならないとして、多様な専門学校を設立するようにと訴えていました。当時大学は、基本的に研究者の養成機関であると考えられていましたから、松下にすれば、職業人の育成を専門学校に求めざるをえなかったのかもかもしれません。しかし、趣旨としては第三分科会と同様だと言えます。産業界、ひいては我が国の発展のためには、多様な能力をもった専門的職業人を育成することが求められている。そのための学校の整備を進めねばならないというわけです。

こうして見てまいりますと、松下の考えと教育改革国民会議の方向性には共通している部分がかなり多く見られるというのは興味深いところです。

いずれにしても、教育問題は、松下が訴えていた通り我が国の将来を左右するほどのきわめて重要な問題です。それだけに、家庭や学校だけに、あるいは政治や行政機関だけにその責任を負わせるべきではないと言えるでしょう。教育は、国民一人ひと

す。多様な学校を設立しやすくすることや、教育に志のある人が学校の設立に参加できるようにすることなどの考え方は、第二分科会の「新しいタイプの学校の提案」の趣旨にきわめて近いものと言えるでしょう。

学校の設立の規制緩和、あるいは学校の多様化については、臨教審以来、少しずつですが着実に進められてきています。ですから、今回の教育改革国民会議・第二分科会の提案は、そうした動きを徹底し、さらに推し進めるように促すものと言えるでしょう。社会が進歩すればするほど、多様な個性、天分をもった人を育成し、生かさねばならないと考えていた松下であれば、おそらくなおのこと徹底してそうした政策を進めねばならないと主張するように思われます。

私が主に担当した第三分科会では、創造性をキーワードに、「今後、我が国が必要とする人材をいかに育成するか」を基本テーマとして議論が進められました。そこでなされた幾つかの提案の中の二つに、「義務教育開始年齢の弾力化」があります。これは、子どもの成長の度合いに応じ、親と学校双方の選択と判断により、小学校へ入学する年齢を一年程度早めることができるようにしようというもので、さまざまな側面から今後、大いに国民的な議論を必要とする提案です。

実は松下もまた、その著書『私の夢日本の夢』21世紀の日本』の中で同様の提案を行っています。小説風に描かれた同書の中では、日本の義務教育の開始年齢が満五歳からになっており、その理由として松下は「それだけ子どもの成長が早まり、幼いうちから共同生活の体験なり知情意の調和ある育成をはかる必要性が高まってきたからです」と登場人物に語らせています。

とりに課せられた責務であり、国民をあげて取り組まねばならない問題なのです。

ちよつどもい、教育改革国民会議では何らとらわれることなく自由な立場で議論し、さまざまな思い切った提案を行なっています。

本稿が読者の目に触れるころには、おそらく教育改革国民会議としての中間報告もまとまり、広く国民の方々に意見を求めているはずですが、是非ともこの機会に、それぞれの立場で身近な家庭のしつけについて、あるいは地域の教育のあり方について考えるときも、今後、我が国の教育はどうあるべきか、何をなすべきかについて広く議論をしていただきたいと思えます。そうすることが、教育改革国民会議の委員をはじめ関係者の願いであり、もとより衆知を集めてよりよい道を求めるという松下の行き方にもつながっていきます。

そして、そうした議論の高まりとともに、国民的な運動として教育改革が進められるならば、来るべき二十一世紀の日本は、松下が望んだように、さらに繁栄し、平和で、幸福に、それ



おえ・ひろし

一九八四年富山大学人文学部哲学科卒業、八六年同大学文学専攻科哲学コース卒業。同年、PHP総合研究所入所。普及部、研究本部、研修局を経て九八年一〇月より、第一研究本部松下理念研究部副主任研究員。松下幸之助の思想の根幹について独自の研究を展開。二〇〇〇年三月から内閣官房内閣内政審議室教育改革国民会議担当室主幹調査官。